
闇

ぐみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇

【ZPDF】

Z6341S

【作者名】

ぐみ

【あらすじ】

第一作。

素晴らしい厨一。

その男は闇にいた。

混沌でもあり空白でもある。
平等であり不平等でもある。
またゼロであり無限でもある。
そこに男はいた。

「あのクソ人間ども。

俺はお前らを超越した。

良く晴れた朝。

見たことの無い場所にいた。
当ても無くふらふら歩く。
歩いて歩いて歩いて。
しかしその後。

ガバツ！

「はあ、はあ、はあ、はあ」

布団の上。

汗をびっしょりかいでいる。時計を見るとまだ午前5時だ。この後風呂に入らなくては。

それよりなんだつたんだ。

夢？

でも何を見たのか。

何が起こつたのかまつたく記憶に残つていない。
なにか恐ろしい事……？

いや。

こんな事を考えていても
意味が無い。

所詮は夢だ。

深く考へる事は無い。

着替えを持つて風呂場へ向かう。
一通り汗を流す。

さつぱりして風呂場をでるとちよづび母が起きてきた。

「あっ、母さんおはよう」「う

まだ寝ぼけているようですが私の姿を見つくれない。

「ああ、おはよう。

今日は早かったのね。」「

やつと見つけて挨拶を返してくる。

「うん。

ちょっとね。

私テレビ見てるね。」「

そういうとリビングへと向かう。

しかしそうはいったものまだ5時半だ。
この時間帯ではニュースや

通販の宣伝くらいしかやっていない。

仕方が無いので天気予報を見る。

「今日は良く晴れた真夏日になつそうです。

気温は25度を超える……」「

天気は快晴。

そういうえばあの夢も良く晴れた日だった……。

いや。

あの夢の事は忘れよ。

強く首を振るともう一度テレビに集中する。

天気予報は終わつたようだ。

今は「マーシャルが流れている。

チャンネルを変える。

違う局のニュースを見る。

と、廊下から足音が響く。

ガチャ

「あ、おねえちゃんふあよ」

妹が起きてきた。

最後はおはようと言いたがつたようだが
欠伸で何を言つているのかわからなくなつていた。

「うん。 それがね。

なんかヘンな夢見たの。

おねえちゃんがずうううと歩いてるの。

そしたらおねえちゃんが急に叫んで

そこで目が覚めた

なにそれ、ヘンな夢。

そういうて茶化す。

・・・・・ん?

おねえちゃんが歩いてる?

急に叫ぶ?

それつて・・・・・。

「ね、ねえ。

それつておねえちゃんが何で叫んだのか
覚えてる?」

妹が首をかしげる。

「ううん。

なんかわからないけど
そののところは覚えてないの」

同じ。

私が見た夢と同じ。
これって偶然?

「わかった。

ありがとう

うん。

偶然だ。

そんな事普通ありえない。
ただの偶然。

忘れよ。

そんな事をしてるとキッチンのほうから
ご飯できたよー。

と母の声がした。

はあいと返事をしてキッチンへ行く。
朝食を食べる。

20分ほどで食べ終わる。

これはもう習慣だ。

この後歯磨き、着替え等をすると
ちょうど家を出る時間になる。

「いってきます。」

私と妹の声が重なる。

私は高校。

妹は小学校だが途中まで道は同じなので
一緒に家を出る。

「あ、そうだ。

おねえちゃん。

今日何の日だか覚えてる?」

唐突に聞いてきた。

「え?

うーん。

わからないな。

なあに?」

すると妹は嬉しそうな顔をして

教えなさいと答えた。

その後も何度も聞いてみたが

教えてくれなかつた。

しばらく歩くと分かれ道。

ここでわかれ。

最後に妹は今日家に帰ればわかるよ。
とだけ告げて笑顔で歩いていった。

今日は6限。

家に帰ると5時は確実に過ぎるだらう。
6時ごろになるかもしれない。

しかしこれもなれたものだ。

あつという間に時間が過ぎていく。
すでに6限目が終了した。

帰路に着く。

そういうえば朝妹が何かいつてたな。
今日が何の日とかなんとか。
まあ、家に帰ればわかるのだ。
考える必要は無い。

しかしもう暗くなつてきた。
少し急ぐか。

軽く小走りになる。

家に着いた。

鍵が開いている。

扉を開く。

ん?

電気がついていない。

玄関にあるスイッチを押す。

つかない。

ブレーカーでも落ちているのか。

暗い廊下を進む。

私の家は構造上最初につくのがリビングだ。

扉は閉まっている。

あける。

ゴツ

何かに当たる。
見る。

「ヒツ！？」

朝はすでにいなかつた。

今日はやけに早いと思つていた。

父。

その父の変わり果てた姿があつた
首と体が別々に転がつている。

「な・・・なに」。

これ

ふと前を見る。

奥の壁に何か掛かっている。
近づく。

『ハッピーバースデー

おねえちゃん』

恐らく妹が書いたのであろう。

ガタガタの可愛らしい字で書いてあった。

「そつか。

私誕生日か。」

自分でなんでこんなに落ち着いてるのかわからない。
余りにも全てが突然すぎて
把握し切れていないのだ。

そしてもう一つ。

近づいた事によってテーブルが死角となり
見えなかつたところに・・・

人影。

「おかあ・・・さん？」

ゆっくり振り向く。

顔は母だ。

しかし違う。

明らかに違うのだ。

そして・・・

血まみれ。

「おかあさん。

なにして・・・」

一步近づく。

それによつてまた新たに見えた。

妹。

無残に頭が吹き飛んだ妹。

そして母の手には、

どこで手に入れたのか銃が握られている。

「ヒッ、ヒヒヒ、ヒ。

ハッピーバースデー」

そういうと銃をこめかみに持つていく。

ガスン！

乾いた音と共に目の前で母の頭が吹き飛んだ。

顔に血と肉片が飛び散る。

徐々に意識が鮮明に

次の日。

家の周りにパトカーの群れ。

二二二

カメラに向かつてしゃべりだす。

「昨夜、この家で殺人事件が起き

被害者はこの家の父親と次女と見られ、

母新が一人を殺害し自分も命を

この朝家周辺は騒然とした。

近所のおばさんが回覧板を届けにきて
チャイムを鳴らしたがででーず、

鍵が空いていたので

首が切り離された父親。

頭が吹き飛んだ母親と次女。

その翌日。

長女が見つかった。

発見場所は近所の林の中。

発見当時長女は座り込んで

何も無い場所を見つめていたらしい。

近づくと

ヒヒッ、ヒヒヒ、ヒ

と小さく笑っていた。

その後の精密検査では精神に異常をきたしていて
もう回復は望めないそうだ。

今彼女は国の機密場所に隔離されている。
これで12人目。

きっかけは違えども症状は全員同じ。
これには国も頭を抱えている。

「ククククク。

これで12人目か。

今日も一人

闇の中に沈んだ。

クツクツクツクツク。

さあて。

次はどういふに

しようか・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6341s/>

閻

2011年10月9日00時22分発行